
二律背反 ー何がありえることなのかー

三也三尺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二律背反 ―何がありえることなのか―

【Nコード】

N5668P

【作者名】

三也三尺

【あらすじ】

交通事故で死んだ夫から「子どもを誘拐した」という電話がかかって来た。そこから日常は崩壊し、徐々にありえない状況が身の回りにおき始める。

すべてが矛盾していく中、いったい、何が起きているのか真実を知ることができるのか。

少しずつ、彼女の周りが壊れていきます。

第一話 日常の崩壊の始まり（前書き）

ちよつと硬めですかね。

まあ、本作品はこんな調子で書きつつ、徐々に内容が壊れていきます。

第一話 日常の崩壊の始まり

1

染みひとつ無い白い清潔なシートが午後の日差しを反射して保健室を明るく照らしている。養護教諭として赴任して以来、変わることなく繰り返されてきた日常の風景。机の上の木箱の中の絆創膏、揺れるブルーのカーテン、薄っすらと漂う消毒液の匂い。

喚声とも悲鳴ともつかない声が、暖かくなり始めた風の吹く校庭に響きわたる。様々な遊びに興じる子供たちの姿を見ながら渡瀬有香は各クラスの保健委員達が届けに来た出席簿をチェックしていた。季節の変わり目になると風邪を引く児童が目立ってくる。各クラスごとの出欠席をまとめて日誌に書き写すとパソコンの電源を入れた。日誌の内容を入力して教育委員会に提出しなければならない。特に月末はその月の集計結果も添えなければいけないので書類の作成に手間がかかる。有香は大きく息を吐いてキーボードに指を置いた。

「こらっ。そんな大きなため息ついちゃ駄目よ」

今まで誰もいなかった筈の室内で突然背後から声をかけられて有香は驚いて振り返る。

「何だ、知美か」

いつの間にか入り口隣の壁に取り付けてある掲示板に三河知美が寄りかかって立っていた。

「まったく何か始めると周りのことに気が回らなくなるんだから。」

それに、校内では三河先生でしょう？」

有香と知美は学生時代からの友人同士で、今に至っても公私共に良き相談相手であり良き遊び相手である。

「あ、ごめん」

「まあ、いいけどね。それよりも何？、さっきのため息」

「これ」そう言って有香はパソコンを指差す。「日誌に書いたもの

をパソコンにも入力しなきゃならないなんて無駄な作業だな、なんてね」

「渡瀬先生は昔から機械類は苦手だからね」

「むう。これでもできるようになってきたんだからね」

「はいはい」

「そう言えば、三河先生は今日って出張じゃなかった？」

「さっき帰ってきたところだよ。教育フォーラムだったんだけど、あまりパツとしない講演内容だったし寝ている人も多かったから途中で切り上げちゃった」

知美は舌を出した。

「大丈夫なの？」

「平気平気。資料さえ貰ってきていれば、説明できるような内容だったからね。あれじゃ最後までダラダラと聞き続けているより戻ってきて仕事したほうがよっぽど教育のためになるよ」

後ろに纏めている髪を縛り直しながら知美は言った。

「で、どうして保健室に？」

有香の問いに知美は人差し指を斜め前方に向けた。その先には丸い壁掛け時計がある。

「どうしてって、冷たいなあ。渡瀬先生のことだから、三時からの職員会議のこと忘れているかなあ……と思って、教えてあげにきたのに」

時計は午後二時半を回ったところだ。

「え!?!。ああ!!、早く言つてよ。私、今日議題があるのに」有香は慌てて立ち上がる。「資料印刷しなきゃ」

学校のルールとして三十枚以下の印刷はコピー機で、それ以上なら印刷機を使うことというものがある。一枚あたりの単価計算の関係するらしいが原則としてこの決まりを皆守っている。職員会議は五十名の先生が参加するので印刷機を使わなければならない。

「まったく……資料何枚あるの？」

知美は有香の側まで歩きながら訊いた。

「えっと、全部で七枚。六枚綴りと一枚ペラでワンセット」

「じゃあ、綴るの手伝ってあげるよ」

知美の言葉に有香は彼女をじっと見つめる。

「印刷機のほう、お願い」

「――ふう。どこまで機械ダメなのよ」

「私がやっていたら間に合わないもの」

有香は両手を合わせる。

「もう、早く印刷室に行くよ」

「あ、ちよつと待って」

有香は慌てて資料の原版を持って知美を追いかけた。印刷室に近づくとかシャンガシャンと印刷機のドラムがリズムカルに回転する音が聞こえてきた。

「先約がいるみたい」

知美が振り返る。

「間に合うかな」

有香が心配そうに言う。

二人が室内に入るとちやうど印刷が終了したらしく長身の男性教諭が用紙を纏めていた。

「遠山先生、印刷終わりました？」

知美がその教諭を見上げるようにして訊いた。

「ええ、今丁度。電源このままにしておいて良いですか」

遠山は逆に見下ろす形になる。彼の身長が百九十センチ前半であるのに対して知美は百五十五センチなので遠目で見ると大人と子供に見えてしまう。百六十センチ後半の有香でも三十センチ近い差がある。

「じゃあ、お先に」

遠野はちらりと有香の方を見て言った。部屋の出口を潜るようにして出て行く。

「……遠野君、まだ有香に未練あるのかな」

知美がぼそりと言う。

「な、何言っているのよ。それに、校内では遠野先生でしょう？」
有香が慌てた様子で言う。

「独り言だから良いのよ」

遠野 真之も二人同様に学生時代からの付き合いがある仲だ。大
学三年の頃に遠野が有香に対して想いを告白したが、その頃には現
在の夫である弘司と交際をしていたため断ったという苦い思い出が
ある。

「さて、印刷印刷」

知美は印刷機に用紙をセットしてボタンを押す。要領はコピー機と
変わらない。年配の先生によると昔の印刷はガリ版とかで手間がか
かるし、使い方が下手な先生はインクであちこち汚してしまうよう
な代物だったらしいが、今はボタンひとつで終わってしまう。この
程度の操作が難しいという有香の機械オンチぶりに、洗濯機とか炊
飯器とかは使えるのかしら、と知美は心配してしまう。

印刷機が動き始め次々と紙が吐き出されていく。最初は表紙で、新
入学児童健康診断についてといタイトルが付いている。

「後は待つだけね」

知美が言った。

「ありがとう。助かったあ」

有香が礼を言うのとほぼ同時くらいに校内放送のチャイムが鳴り、
続いてスピーカからアナウンスが流れた。

『渡瀬先生、渡瀬先生。至急、職員室までお願いいたします。渡瀬
先生、至急職員室までお願いします』

「あれ？。私、呼ばれたみたい」

有香は人差し指で自分の鼻の頭を押さえて言った。

「もう、タイミング良いなあ。いいよ、後はやっておいてあげるか
ら行っておいで」

「ありがと。後でなんかお礼するから」

有香は両手を合わせてウィンクすると部屋を出た。印刷室の隣が
教員用の資料室。そしてその並びに校長室、職員室と続いている。

有香が職員室に向かって足を踏み出した瞬間に、その入り口から慌てた様子の教頭の富機が出てきた。

「あ——渡瀬先生、急いで来てください」有香の姿を認めた富機が早い口調で言った。

その尋常ではない様子に、有香は児童に事故が起きたのではないかと想像して駆け出した。

「教頭先生、何かあったんですか？」

有香が言った。

「渡瀬先生に病院から電話が入っている」

「病院ですか？」

有香は予想していない回答に大声で聞き返してしまった。職員室にいる何人かの教諭が驚いて振り返っている。

「詳しくはご本人に直接お話しするということなんだが」いったん富機は息を呑むように間を空けて続ける。「旦那さんが事故に会われたらしい」

「え？」

一瞬体が固まるような感覚と共に富機の言葉が現実感を押し退けるように意味が分からない響きとなって耳の奥でリフレインする。しかし、また次の一瞬には電話に向かって駆け出していた。受話器を上げ、保留ボタンを解除する。

「もしもし、渡瀬です」

『渡瀬弘司さんの奥様ですね』

逸る有香を落ち着かせるかのようにゆっくりとした口調の女性の声が聞こえた。

「はい」

『こちら第一市立病院です。先ほど、自動車に撥ねられたと見られる状態で弘司さんが運び込まれました。所持していたものから奥様の連絡先が分かりましたのでご連絡させていただきました』

「え、あの——」有香は言葉を詰まらせた。「撥ねられたと見られるというのは……」

『それに関して詳しいことにつきましては警察の方からお話があると思います。弘司さんの状態ですが、現在、まったく意識の無い状態です。すぐにでもこちらに来ていただけますでしょうか』

「そんな……」有香はつぶやく。頭の中が真っ白になっていく。今にも膝から崩れてしまいそうなほど全身から力が抜けていく。

『――よろしく願います。』

受話器を置くと同時に電話で聞いた言葉が強い現実感を持って押し寄せてきた。

「教頭先生」有香は近くで様子を見守っていた教頭に言った。「年休をお願いします」

「分かった。校長には伝えておくから早く行きなさい」

「ありがとうございます」

言うが早く有香は駆け出していた。

第二話 予感（前書き）

暗い話になっていきます…
最初はとことんです。

第二話 予感

2

第一私立病院は学校から国道沿いに車で三十分ほどのところにある四階建ての建物だ。通勤のときに横を通るので場所は見知っている。朝は道が混んでいるため両車線とも渋滞することが普通で倍近い時間がかかることもあるが、今の時間は比較的空いているらしく、そんなに与ることができた。

駐車場に入ったが建物の玄関口近くが空いていないためやむなく少し離れた場所に車を止めた。急いで車を降りて入り口に向かう。一階は外来の待合になっており、順番待ちの患者が静かに座っていた。その後ろを通り過ぎナースステーションに向かう。

「すみません」

有香はカウンターから身を乗り出すようにして言った。

「はい」

奥にいる看護師が振り返りやってきた。

「渡瀬、渡瀬弘司の妻です。夫が事故で運び込まれたと連絡を頂いたのですが」

「渡瀬さんですね。少々、お待ちください」

看護師はそう言って手元にある端末を操作し始めた。有香が不安な面持ちでその様子を見守っていると、看護師が一瞬表情を固めたように見えた。

「――先生をお呼びいたしますので、しばらくお待ちください」

看護師は端末から顔を上げると、そう言って奥に戻りインターフォンを手に取った。有香の位置からでは聞き取れないくらいの大きさの声で話をしている。会話が終わるとそのままの位置で有香の方を向いて、もうしばらくお待ちくださいと言った。

有香の心に嫌な予感が広がっていく。僅かな時間が引き延ばされ、

とても長い時間に感じられる。それでいて心臓の鼓動だけはいつもとより早く胸を打ちつける。大丈夫。だって、朝はあんなに元気だったじゃない。大丈夫に決まっている。由香はその言葉を反芻するよう心の中で繰り返す。

しばらくして、白衣を着た医師が向かってくるのが眼に入った。有香は思わず走り寄った。

「先生、主人は……主人は」

「渡瀬さんですか？」

医師は低く静かな声で言った。

「はい」

「こちらへどうぞ」

医師はそう言うのと左にあるドアを開けると有香に室内に入るように促した。

部屋はナースステーションに直結した個室になっており淡いピンクのカーテンで仕切られていた。椅子が四脚とテーブルが置いてあった。

「お掛け下さい」医師は、掌で指した椅子に由香が腰を下ろしたのを確認するとその場に立ったまま訊ねた。

「ご主人が事故に遭われた——と言うお話は聞いていますね」

「は……はい。それで、主人は……」

「——申し訳ありません」医師は息を吸い込み、少しの間、目を瞑った。「最善を尽くしましたが……」

「え？」

途中で切られた予想外の医師の言葉の意味が飲み込めずに有香は聞き返した。

「それは、どう言う——」

医師は有香の目を見て、ゆっくりと言った。

「ご主人……渡瀬弘司さんは、先ほど息を引き取りました」

「え？」

信じられない言葉に由香は目を見開いた。

「外部の出血は然程見られませんでした、全身を——特に頭を強く打っています。詳しくは後ほど調べることになりますが、そのショックが直接の原因と考えられます」

「朝——あんなに元気だったのに？」

自分に問いかけるように由香が言った。その声は上擦っている。

「智と一緒に、行ってらっしゃいって見送ったのに？——行ってきましたって笑ってくれたのに？」

俯く有香の右目から一筋の涙が伝った後、堰を切ったかのように次々と溢れ出た。

しばらくの間、沈黙の時間が流れた。ドア一枚向こうのナースステーションで見舞い客の対応をする看護師の声がずいぶん遠くで、それでいてはつきりと聞こえる。

「……お辛いところ申し訳ありません」重い空気の中、医師が口を開いた。

顔を上げた有香に医師は続けて言った。

「一応、ご本人確認をお願いいたします」

「ご本人？」

「ええ。所持品から渡瀬さんであると確認したのですが、ご親族の方に一度確認していただかなければ断定できませんので」

——もしかしたら、別人かも知れない。

「分かりました」有香は一縷の望みを抱いて応えた。

医師は頷いて部屋のドアを開けて、廊下に待機していた看護師に、よろしくと声をかけるとその場を立ち去った。

「ご案内させていただきます」部屋から出た有香に看護師が声をかけた。

「お願いします」

有香は軽く頭を下げて応えた。

有香は歩き出した看護師の後に続いて行く。

「地下に移動しますね」

ナースステーションの隣にあるエレベータの前で看護師はそう言

うとボタンを押した。階数が少ないので、待ち時間も無くドアが開いた。担架や車椅子の移動のために通常のエレベーターよりもかなり広めな室内に二人が乗り込むと、静かにドアが閉まった。僅かな慣性を感じた後、再びドアが開くと蛍光灯の明かりが妙に眩しい廊下にでた。

そこからまっすぐ進んで突き当たりにある重そうな扉の前で看護師は立ち止まった。扉の上の壁からは『靈安室』と書かれたプラスチックのプレートが突き出ている。

「こちらになります」

看護師は観音開きになってる扉をゆっくりと引いた。重厚な扉なのでギギなどと音を立てそうな感じだったが、見た目に反して音も無く静かに開いていった。

部屋の中はひんやりと冷たい。妙に明るい蛍光灯の光が更にそれを増徴しているように感じる。然程の広さが無い部屋の造りは簡潔で、真ん中に寝台が置いてあり、頭上には白い棚が置いてある。その飾りの無い寝台の上に身体と顔に布がかかった状態で人の形に膨らんでいる。その胸が上下することもなく、ただ静かに横たわっているだけだ。今いる自分の世界とは違い場所を垣間見ているような不思議な錯覚がする。有香は入り口を入ったところすぐの位置で次の一步を踏み出せぬまま立ち竦んでいた。その様子に看護師は何も言わずに寝台の隣に着くと静かに顔の布を取った。

「ご確認をお願いします」

看護師の言葉を聞き終わる前に、有香は小さくヒュッと息を飲み込んだ。眠っているような静かな顔と、今日の朝、玄関で見送った笑顔が重なる。その顔が安物のデジカメで撮影した手ブレ写真のようには滲んでいく。涙が頬を伝った。

「――弘司」

近寄らなくても分かる。間違いは無い。そこに横たわっていたのは、紛れも無く有香の夫であった。

「……ウソよね」

有香はゆつくりと側に寄る。今まで見たことの無い生気を失った血色の無いその顔を見て、感情が溢れ出した。たくさんの思い出と切望していた未来図が蛍の光のように浮かび上がっては消えていく。「弘司——どうして……ああああ」

密閉された空間に悲痛が増幅されるように声が反響する。有香は何度も何度も最愛の夫の名を呼んだ。しかし、泣き叫ぶ声にあの低く優しい声が反応してくれることは無かった。

しばらくの間、俯いたままその様子を見守っていた看護師がゆつくりと言った。

「渡瀬弘司さんで、間違いありませんか」

有香は弘司の顔から目を離さずに頷いた。

「……ご愁傷さまです」看護師は静かに言った。「この後、検死が行われます」

「検死？」

「交通事故で亡くなられた場合、検死が法律で定められているんです。それに今回の場合は——」

「今回の場合？」

看護師が切った言葉を有香は訊き返した。

「いえ。そのことに関しては別にお話があると思います」看護師はそれ以上訊かれても応えることはできないという意思を示すかのように事務的な口調で言った。「お引渡しは明日の午前中になるかと思いますが」

「……分かりました」

淡々と言う看護師のお陰か少しだけで有香の感情が落ち着きを取り戻すことができたのかもしれない。冷静に弘司の顔を見ることができるようになった。同じ瞼を閉じている状態と言っても眠っている時とは違う無表情な顔。

「——よろしいでしょうか」看護師が訊く。

「はい」

有香は小さく言った。看護師の手で遺体の顔に白い布が掛けられ

る。それを合図にするように、また部屋の中に冷たいくらいの静寂が舞い戻った。

無言で部屋から出る看護師の後に続いて有香も廊下に出た。

「先ほどのエレベーターで一階にお戻りください。警察の方がお待ちになっております」

「警察？」

「今回の事故についてお話があるそうです」

看護師はそう言って頭を下げると来た時とは反対方向に去って行った。

有香は呆然としたままエレベーターに乗り込むと一階へと戻った。ドアが左右に開くと、廊下に置かれている長椅子に腰掛けた二人の男が立ち上がるのが目に入った。二人ともネクタイを締めているが普通のサラリーマンにはない鋭さが目に宿っている。一人は五十歳を少し超えているくらいだろうか。頭に白いものが混じっている。もう一人はその半分くらいに見える。

「県警捜査一課の及川です」

歳をとった方が頭を軽く下げると続けてもう一人が名乗った。

「同じく真辺です」

「片瀬さん、片瀬弘司さんの奥様ですね」

「は……はい」

及川の低い声に有香は緊張気味に応えた。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

本人が思うような効果をいまひとつ挙げる事ができない笑顔を及川は作って言った。

「早速ですが」真辺が手帳を開いて言った。「弘司さんは本日午後一時頃、市内の中央二丁目の路上で倒れているところを通りかかった人に発見されました」

「中央二丁目……ですか？」有香は聞き返した。

「ええ。お心当たりはありますか」

「いえ……」

有香は首を横に振りつつ考えた。中央二丁目と言ったら、駅前の通りから少し外れた所だ。家から普通に駅に向かう場合は通ることは無い場所だ。それに都内に勤めに出ているはずなのに、午後一時頃にこの付近をうろついていたと言うのはどう言う事だろうか。しかもよりによって中央二丁目とは……。

「旦那さん、お勤めはどちらですか」及川が訊く。

「都内——新宿です」

「——うむ。都内ですか……」

及川は眉間に刻まれたしわを更に深くして呟いた。おそらく有香が考えた疑問と同じことを考えているのだろうが、それを口に出すことはせずに黙り込んだ。その様子を見ていた真辺が手帳に目を落とし話を進めた。

「現場にブレーキ痕が残っていたのですが、どうやら大型のバイクのようなものに撥ねられたようです」

「——バイクですか」

「はい。正確な事は検死の結果次第ですが、医師の診断によれば背後からのようです」

その後を引き継ぐように及川が続けた。

「ここからは奥さんにはちよつとショックな話になってしまいかも知れないけど良いですかね」

「……お願いします」

それが事実であるならば、そしていつかは知らなければならぬことであるなら、できる限り早めに知っておいたほうが良い。有香はそう考え返事をした。及川はそれを見て頷き、真辺に目で合図をした。

「現場に残されたブレーキ痕からすると、バイクは、跳ねる前ではなく撥ねた後、少し進んでから停止したと考えられます」

「どういことですか」有香が訊く。

「つまり、意図的に弘司さんを狙って撥ねた可能性があります。もちろん、今のところ可能性に過ぎませんが。バイクは弘司さんに突

っ込んで行き、跳ね飛ばした後、様子を確認するために停止した……と考えられます」

「そんな……」

有香は言葉を失った。何のために弘司をそんな目に合わせたのか理解ができない。

「で、犯人はそのまま立ち去りました」

「轢き逃げ……ということですか」

「はい。それも意図的と思われる轢き逃げです」

意図的な轢き逃げ。それは言い換えれば車を凶器とした殺人だ。

「現在、目撃者がいないかあたっているところなんですがね、如何せん、あの辺りで昼前後となりますとねえ」

及川はボールペンの後ろ側で自分の頭をトントンと叩いた。有香は及川の言葉を聞きながら、自分の中に浮かんでくる夫への疑いを振り切るため、いろいろな答えを見出そうと考えた。

——何故、弘司は会社に行っていなかったのだろう。何故、中央2丁目……ホテル街と呼ばれる場所にいたのだろう。何故、事故に遭わなければならなかったのだろう。何故——。

しかし、嫌な想像が膨らむばかりでよい答えは見つからなかった。

第三話 狂い始める日常の（前書き）

少しずつ、ダークネス。

第三話 狂い始める日常の

配偶者が亡くなった場合、十日間の忌引き休暇を申請することができる。有香は土日に合わせて十四日間の休みを取った。

ちょうど春休みの期間に入ったので年休を取ることも可能だが、新入学児童のための健康診断の準備などやらなければならないことがたくさんあるため、これ以上休むことはできない。二週間程度で心が癒えるはずもないが、これからは自分の力だけで息子を育てていかなければならないという使命感と仕事に対する義務感でなんとか机に向かっていることができた。

——とは言っても今日はまだ週の始まりだ。一週間の終わりがとても遠くにあるような気がする。保健室に閉じこもっていると、あれこれ考え込んでしまいうるので、人の出入りの激しい職員室で過ごすことにした。

養護教諭という立場上殆どの先生と関わりがあるためか皆が有香に対して次々とお悔やみや慰めの言葉を掛けていく。特に午後の授業が終わって時間の空いた先生がやってきて、いろいろと話かけてくれるのだが逆にその気遣いが堪らなくなり、有香は結局保健室に引っ込むことにした。

「こっちに来ると思ったよ」

既に保健室には知美が待ち構えていた。窓際で丸椅子に腰掛けて前後に揺れている。有香はその隣に歩いて行った。

「先生方のお気遣いは有難いんだけど——なんだか、みんなに慰められ続けていると逆に哀しくなってきた……」

「有香のこと、みんな本当に心配してくれていたんだよ」

「うん。分かってる。で、——学校では渡瀬先生……でしょ？」

有香は弱々しく微笑んだ。

「ごめん。そうだったね」

知美は無理をして作ったような有香の笑顔を見て哀しくなり、窓の

外を向いて応えた。有香も外を見つめたまま、しばらくの間沈黙した。

今日は朝から雨が降っている。こういう日には怪我人は少なくなるが、体調を崩してしまう児童が多くなる。今日も例外ではなく放課後になる前まで2つあるベッドが空くことはなかった。

「――まだ、犯人捕まらないんだ」

窓の外の雨垂れを眺めながら有香がポツリと呟いた。

「ちゃんと調べてくれているの？」

「調べてくれていると思う。少しでも情報が入ってくれば逐次教えてくれるし」

「――そうなんだ。せめて少しでも早く犯人が捕まれば良いね」

轢逃げ犯が捕まったところで弘司が戻るわけではない。そして元通りの生活に戻るわけではない。それでも、この遣る瀬無い気持ちが少しでも薄れるのだろうか、と有香は思った。

「事故車だけでも特定できれば捜査も進むんだろうけど……」呟くように言う。

「――隠そうと思えば隠し場所がいくらでもありそうだからね」

知美の言葉に有香は俯いて小さく「うん」と言った。

確かにいくらでも隠し場所はあるだろう。大型と言ってもバイク程度の大きさなら、ほとぼりが冷めるまで家の中にしまってしまうこともできるだろう。人に気づかれぬ場所に、こっそりと捨ててしまふことも容易かもしれない。自動車ではそうはいかないだろうが、スクラップにしてしまふよりも簡単に証拠隠滅ができてしまふそうだった。それは大きな不安材料である。

「でも大丈夫だよ。警察に任せておけば、きっと捕まえてくれるよ。日本の警察は優秀だって言うし」

落ち込ませてしまったのを氣遣うように知美は少し明るいトーンで言った。

「うん。ありがとう」

「……あのさ。今週の休みにでも智君を連れて総合公園でも散歩に

行かない？」

「え？——でも」

気乗りしない感じで有香は口籠った。こここのところ休みの日は外に出る気になれず、買い物に行く以外は家に閉じ籠っていた。

「智君だって、たまにはお出かけしたいんじゃないの？」

「う、うん。そうかも知れないけど」

それでも渋る有香の肩を軽く叩いて知美は微笑んだ。

決まり。有香も少し気分転換したほうが良いと思うよ」

「うん。ありがとう」

強引だけど自分のことを思い遣ってくれる親友に感謝して有香は微笑み返した。

「よし。そうと決まればテストの丸付け早めに終わらせちゃおうかな」

そう言って知美は立ち上がり保健室の出口まで行き立ち止まった。

「じゃ、また来るね」

「うん。分かった」

有香は知美の後姿を見送ると小さく息を漏らした。強引に話を運んでしまうところは昔から全然変わらない。だけど、毎回それに救われることも確かだ。悩んでいた、落ち込んでいたりするときに彼女と話をすると少し心が軽くなる。有香は立ち上がって、その場で伸びをした。

「確かに知美の言うとおりね。智のためにも私が元気を取り戻さなきゃ」

有香は保健室の入り口に、『見回り中』の札を下げると体育館に向かうことにした。体育館は職員室のある棟から渡り廊下を越えて低学年の棟に入り、すぐ左に曲がって少し進んだところにある。校舎の棟とバリアフリーで連結されていた小学校用としては大きめの体育館となっている。少子化が騒がれ始まってから建てられたため多目的に使用できるように設計された設備が多い。もし、この建物が学校として機能することができなくなっても別の用途で利用できる

ようになっていゐるわけだ。

体育館に近づくにつれ嬌声が大きくなってくる。雨のため一日中外で遊べなかった児童たちの鬱憤が解放されている。塾の時間まで学校で時間を潰していたり、保護者が迎えに来るのを待っていたり、目的は様々だ。

「あ、渡瀬先生だ」体育館に入ると早速女の子が走り寄ってきた。

「先生、縄跳びしようよ」

「ごめんね。今、見回り中だから、今度ね」

有香が断ると女の子は、なあんだ、と言つてもといった場所に走り去った。この時間に残っている子達は、いつも同じメンバーなので聞き分けが良い。

有香は、入り口近くの壁に寄りかかつて、それぞれの遊びに興じる児童をぼんやりと眺めていた。どのくらい時間が経つただろう。不意に頭上から声を掛けられて、びくつと身を震わせた。

「大丈夫ですか」

遠山が心配そうな顔で見下ろしてくる。

「すいません。ぼーっとしちゃって……」

「いえ。心中お察します」

「ありがとうございます」

有香は軽く頭を下げる。

「もし、僕にできることがあったら言ってください。微力ながらお手伝いしますから」

遠山の言葉に再度礼を言つて儀礼的な笑みを返した。

その後、しばらく会話も無く何となく重苦しいような時間が流れた。無言の状態でもお互いの間を様々な気遣いが往復している感じがする。子供たちの声と床を撥ねる音、ボールが弾む音、縄跳びの音。それらが閉じられた体育館の中で反響している。増幅された賑やかな騒音が気まずい空気を育てて、少しずつ重力を与えていく。その空気の重さに耐えられなくなり、有香は口を開いた。

「――そろそろ戻らないと」

「え？、あ……そうですか」

遠山は、やや残念そうな語尾を含めて言った。有香は軽く頭を下げると体育館を後にした。遠野に対してはどうしても素っ気無い態度をとってしまう。別に嫌っているわけではないのだが、交際を断ったという気まずさがあるのかも知れない。優しい言葉を掛けられると罪悪感を感じてしまう。遠野は既に過去のことは割り切っている様子だ。私も普通に接しないと彼に対して失礼だ。そんなことを考えながら、低学年棟から渡り廊下に曲がるT字路に差し掛かったところで前方に知美の姿を見つけた。手に持ったテスト用紙を見ながら前方から歩いてくる。

「三河先生」

有香はT字の交点で立ち止まって声を掛けた。

「あれ、どうしたの」知美は顔を上げて言った。

「うん。ちょっと体育館に見回りに」

「そう。お疲れ様」

「途中で遠山先生が来てさ……」

有香は語尾を窄める様にして言った。

「なるほど。それで、気まずくなって逃げてきたってワケね」

「逃げたって訳じゃないけど」

それを訊いて知美は、ふーんと鼻を鳴らした。

「と……ところで、仕事が終わりなら駅まで送っていいとか？」

話の雲行きが怪しくなりそうなので、有香は話題を変えた。

「え？。わあ、助かるう。随分強く降り始めたから、ちょっと参ったなって思ってたんだ」

学校から駅までは歩いて十分ほど離れている。途中通る住宅地の水捌けが悪く、水溜りができやすい。今日くらい降っていると辿り着くまでには靴の中まですぶ濡れになってしまうだろう。

「じゃあ、帰り支度をして私の車まで来て」

「オッケー」

軽い返事をしてパタパタと職員室に向かう知美を見送って、有香

は保健室に入った。既に纏めてある荷物を手に取ると、一足先に車へと向かった。

運転席に乗り込むとしばらくの間、水滴の流れるフロントガラスを見つめた。中古で購入した車なので、本当は暖気をしておきたいのだが、学校の敷地内で無駄にエンジンをかけておくことは禁じられている。

やがて、水滴越しにぼやけた赤い傘が向かってくるのが眼に入った。

「お待ちせ」

知美が助手席のドアを開けて乗り込んだ。

「じゃ、行きますよ」

そう言って有香がエンジンを掛けて車を走らせる。

「このまま車通勤続けるの？」

知美はシートベルトを引きながら言った。

「うん。朝は渋滞して大変だけど、慣れちゃえばどうってことないから。それに、まだちょっと怖いし」

有香は軽く眉をひそめた。

「そっか。やっぱり、まだ駄目？」

「ちよつとね。もうしばらくは電車とかムリかな」

「まあ、車に乗れるんだったら、そのほうが便利だろうけどね」

「知美も免許取れば良いのに」

「ムリムリ。私みたいな鈍いのが免許なんて取ったら……」

そこまで言いかけて知美は慌てて言葉を呑みこんだ。事故を起こす、などと言う言葉は今の有香に聞かせるものではない。

「もうすぐ駅に着くよ。すごい雨だけど大丈夫？」

不自然に切られた知美の言葉を気にしていない素振りをして有香は言った。

「うん。ありがと」

駅のロータリーに入るため右折のウィンカーを点灯させる。点滅とともにカチカチと鳴る音が、雨粒がボンネットを叩く音に掻き消

されていく。徐々に雨脚が強まっているようだった。

「家まで送っていいのかな？」

「大丈夫。うち、駅から近いから」知美は顔の前で手を振った。

「そう。気をつけてね」

有香はできる限り駅の入り口に近い場所に停車した。

「有香も気をつけて」

知美は言うのと車を降りながら傘を開いた。屋根の下まで十秒程度の距離だが、傘を差さないとその時間だけでずぶ濡れになりそうな勢いで降っている。

改札口の前で手を振る知美に手を振り返すと由香は自宅に向けて車を発進させた。風も出始めたようで、駅に向かって歩いてくる人たちが傘を前方に倒していて、色とりどりの丸い円が歩道に散らばっているように見えた。

第四話 壊れる日常の（前書き）

タイトルの意味。その核心の物語がやっと始まります。
まあ、今までの前置きですね。

第四話 壊れる日常の

マンションの駐車場は屋内になっていて居住棟と隣接しているので、雨の日でも車から玄関まで濡れずに移動できる。車好きだった弘司は、この駐車場と集合住宅にしては広いバスルームが気に入ってここを購入したのだ。

弘司はゲーム会社に勤務していた。そんなに大きな会社ではないが最近ヒット作を連発していたようだ。それに比例して受け取る給料もそれなりの額だったため、まだ若いながらも立派なマンションを購入することができた。わずかにローンもあるがそれは弘司が残してくれた保険金が充てられる予定になっている。もし、賃貸のままだったら、家賃と子供の学費だけで高いとは言えない公務員の給料だけでは大変だっただろう。家族のことを常に考えてくれていた弘司に有香は感謝した。

エレベータホールの窓から外を見ると、風は強いままだが雨は上がっているようだった。

今の時間帯は帰宅する人が多いようで、他の階で頻繁にドアの開け閉めをする音が聞こえる。有香はスプリングコートポケットから家の鍵を取り出すとドアの鍵を開けた。

「ただいま」

そう言っただけで靴を脱ぎながら何か違和感を感じる。いつもなら『おかえりい』と飛びつくように玄関に迎えに来ってくれるはずの智が姿を見せない。

「智、ただいまあ」

もう一度、有香は言った。しかし、姿を見せるどころか部屋の中から気配すら感じない。

「智、智お！」

有香が部屋に向かって声を大きくする。しかし、何の反応も返ってこない。今の時間に家に帰ってきていないなんてことは今まで一度

も無かった。

「智？。いないの？」

有香はリビング、寝室、和室、弘司の書斎だった部屋と順に見て回った。しかし、どこにも姿が見えない。トイレや風呂場にもいなかった。

「――どういこと？」

有香に焦りが表れる。起こりうる可能性を考える。

まだ、学校から帰ってきていない――ということはないだろう。まだ入学したばかりの小学校一年生が、この時間まで学校に残っているはずが無い。近所に遊びに行っている――これも無いだろう。五時には家に帰っているように厳しく行っている。智がこの約束を守らなかったことは、今まで一度も無かった。

有香は台所のシンクを確認した。使用済みのコップが置いてある。

智は外から帰ると、冷蔵庫に入っている作り置きのお茶を一杯飲む。おそらく、このコップは智が学校から帰ってきて使ったものだろう。言うことは、智は少なくとも一度は帰ってきているはずだ。有香は家の中をもう一巡してみたが、やはり智の姿は見当たらなかった。いくつかの心当たりで連絡を取ってみようとカウンターキッチンに置いてあるグレーの色をしたコードレス子機に眼を向けた。すると留守番とかかれたボタンが赤く点滅している。有香は電話を手に取り、再生のボタンを押した。

『2件のメッセージがあります』

少しの間を置いて音声流れる。

『一件目。今日の午後13時40分――』

しかし、その後に続いたのはノイズのような雑音だった。有香が困惑していると、何となく聞き覚えがある声で呻くような声が聞こえた。それは僅かな時間でピーという発信音に遮られた。

「――何……今の？」

『二件目。今日の午後13時42分――』

有香の疑問は置き去りに、続けて音声流れた。

『……僕達の……息子………預かっている。また……連絡する——』

二件目には、しっかりと聞き取れるメッセージが入っていた。それは随分と剣呑な雰囲気が漂うものだった。しかし、誘拐と受け取れる内容よりも、その声の有香は驚愕して立ち尽くした。

「——弘司？」思わず声を出して名前を言う。

「本当に——？」

そう言いながら、もう一度、一件前まで記録位置を巻き戻して再生する。

『……僕達の……息子………預かっている。また……連絡する——』

——間違いない。

再度聞いて確認できた。ノイズ音が入っていたり途切れ途切れだったりで聞き取り辛い箇所もあるが、この声は事故で亡くなった筈の有香の夫、弘司のものであった。現実的にありえることではないという理性が、有香にもう一度巻き戻して再生ボタンを押させたが聞こえてきたのは、疑惑を確信に近くする懐かしい声だけだった。声も話し方に感じる独特のアクセントも間違いなく弘司のものだ。何よりも『僕たちの息子』と言っている。

「なんで弘司が？。——なんで智を？」

まるで誘拐の脅迫のようなメッセージを死んだ夫が留守電に残す。そして、実際に智の姿が見当たらない。有香は少しずつ込み上げてくるパニックを何とか抑えようとする。混乱しても良い結果にはならない。特に養護教諭を勤める者として

有事に取り乱しては自分を頼ってくれる子供たちにまで不安な思いをさせてしまう。こんな時こそ冷静に的確に物事を考えなければいけない。

「————ふう」

有香はゆっくりと静かに息を吐き出した。

——そう。ここで混乱している場合ではないはずよ。現に智の姿

が見当たらないのだから、それを優先に考えなくちゃ。

時計を見るとそろそろ午後八時になろうとしていた。智は今まで、この時間に何の連絡も無く外に出たまま帰ってこないなんてことは一度も無かった。それに夫の声であるかは別としても、智の身に何か起きたことを暗示するような留守電が残されている。

——警察に電話するべき……でも、その前に。

警察に助けを請う理由は充分だが、それでも今の自分の判断が正常かどうか自信を喪失した有香は、もっとも頼れる友人である知美の携帯電話の番号を呼び出した。

『——もしもし、どうしたの』

番号通知を見て有香だと分かっている知美は、滅多に掛けてこない時間帯に電話を鳴らした友人を心配するような声で言った。

「……………」

しかし旧知の友人の声を聞いたら安堵したためか、一気に涙が溢れてきて言葉に詰まった。

『どうしたの！？。何かあったの？』

受話器の向こうにいる有香の様子がおかしいことに気が付いた。

「——智が……智がいないの」

『どういうこと？』

「帰ってきたら、智がいないくて……留守電が入っていて」

『留守電？。なんて入っていたの？』

「ぼ……僕達の息子は預かっている——って」

『——何それ？』

知美は訊き返した。

「分からない。でも、弘司の声でそうメッセージが残っていたの」

『弘司さんの声で？』

知美の声がさっきより一段高くなる。

「何度も聞き直してみただけど似ているとかそう言うのじゃなくて」

『うーん。有香には悪いけど、それはあり得ないと思う。きっと混

乱しているんだよ』

「でも――」

有香の言葉を遮って知美が言った。

『弘司さんが電話をかけてきたのかどうかは別にしても、不審なメッセージが留守電に残っていて智君の姿が見当たらないことは事実でしょ?』

「――うん」有香は力なく応えた。

『じゃ、まず念のため智君の学校に連絡して児童が残っていないか確認したほうがいい。まだ八時だから誰かいるでしょう』

「一年生は午前中で帰りだから今の時間まで残っていることはないと思うけど……」

『うん、まあ、だから念のためね。で、下校してからだいぶ経っているようだったら警察に相談したほうがいいと思う』

「警察に?」

『そう。そのために警察があるんだから』

「うん。分かった」

『私は私で自転車で有香の家に向かいながら近所の公園とか探してみよう』

「え?。でも態々――」

『いろいろな回りながらだから二時間くらいで着くと思う』

「――ありがとう」

遠慮の言葉を聞かないふりをして尽くしてくれる親友に感謝をこめて有香は言った。

『じゃあ、何かあったら携帯に連絡しようだい』

知美の言葉で通話が切れた後、有香は言われたとおりに学校と警察に連絡を入れた。

学校に関しは、やはり一年生は午前中で下校しているようだった。いろいろ聞かれたが、まだはっきりと状況が分からないのにいろいろ話してしまうわけにもいかないので、『そう言えば、友達の家遊びに行くって言っていたのを忘れていた』などと多少苦しい言い

訳をして誤魔化した。

警察への連絡は知美の意見に従って留守電に不審なメッセージが記録されている件と息子の姿が見当たらない件を伝えた。さすがに留守電という物証があるためか、すぐに最寄の派出所から警察官を向かわせて確認させるとの事だった。有香は精神的な疲労が重なったためか、その場に座り込んだ。

「――どうして、こんなことばかり起きるの？」

有香は声にならない声で呟いた。

不吉な事が続きすぎる。その上、死んだはずの夫が息子を誘拐したかも知れないなんて。知美の言う通り何かの間違いと考えるしかない。あり得ることではないのだから。でも、あの声は確かに弘司のものだった。声だけではない。一緒に過ごしてきたから分かる独特の息遣いというか言葉の間というか……。とにかく、弘司の声であることに間違いはないのだ。だけどホラー映画じゃあるまいし、死んだ人間が電話をかけてくるなんてあり得ない。でも、もし――。――ピンポーン。

静か過ぎる部屋の中に響いたチャイムの音に、有香はビクリと身を震わせて我に返った。急いで立ち上げるとドアホンのボタンを押した。

『こんばんは。通報を受けて参りました』

そのうちの一人がインターホン越しに言った。

「あ、はい。今開けます」

有香は玄関まで小走りで行き、ドアスコープで外に立っている者が制服を着ていることを確認するとドアを開けた。立っていたのは眼鏡を掛けている痩せた警察官と、それとは対照的に体格の良くて浅黒く如何にも体力に自信がありそうな警察官だった。

「通報を受けて参りました」

体格の良い方が言った。

「すいません。あ、玄関に入ってください」

有香が言うと二人の警察官は、失礼します、と言って中に入った。

一般的なマンションよりも広めに造られた玄関でも大人三人が立つには多少窮屈だ。

「部屋に上がりますか」

「いえ。ここでお話をお伺いいたします」眼鏡の警察官は簡潔に有香の勧めを辞退すると会話を進めた。「通報いただいた内容は既にお聞きしています。その確認をさせていただきます。場合によっては専門の人間を呼ばせていただくことになります」

「お願いします」

有香は今までの経緯を説明した。警察官は二人とも相槌を打ちながら手帳にメモを取っている。

「――なるほど。その留守電は今も聞くことができますか」

眼鏡の方が質問を含めた会話担当らしい。

「はい。消去しないように保存してあります」

「その声に聞き覚えがありますか」

有香は躊躇したが、正直に答えることにした。

「それが……夫の声に聞こえるんです」

「え？」

思った通り、警察官は絶句して二人で顔を見合わせた。やがて、困ったような苦笑いの表情を作っていた。

「困りますよ、奥さん。それだったら旦那さんに連絡してください」夫婦喧嘩の纏れか、離婚後の親権争いのような情事と思ったのだろう。眼鏡がそう言って手帳を閉じた。

「……夫は――先日、事故で亡くなりました」

「え？」

再び二人が絶句した。

「夫は既に亡くなっているんです」

もう一度、言葉にするだけで辛い言葉を有香は口にした。

「も、申し訳ない。それは、どう言う事でしょうか」

眼鏡の警察官が戸惑いながら言った。

「夫は先日、交通事故で亡くなりました。その夫の声と留守電に残

っている声が同じなんです」

「かなり似ているわけですね」

「そうじゃなくて——夫そのものなんです」

有香の訴えに一瞬眉を寄せつつも警察官は諭すように言った。

「一度留守電のメッセージを聞かせていただいてよろしいでしょうか」

「はい。電話は奥になりますので、上がってください」

「わかりました。では、失礼します」

二人の警察官がリビングに案内された直後に、電話の呼び出しが鳴り響いた。有香が番号表示を確認した後、受話器を取らずに手を乗せたまま警察官の方を見る。

「番号非通知です。……出ても良いですか」

「ええ、お願いします。可能なら我々にも通話内容を聞けるようにしていただけますか」

有香は頷いてハンズフリーのボタンを押した。機械類が苦手な有香でも、家事と育児で手が離せない状況が何度もあったため、手ぶらで通話ができるボタンはマスターしていた。

徐々に電話のスピーカからザーザーというノイズ音が聞こえてきた。時々、甲高い発信音のようなものも聞こえてくる。その雑音の中から少しずつ人の声らしきものが聞こえ始めた。

『——……か』

有香は息を吞んだ。残されていたメッセージと同じ声だ。

『……ゆ………か………ゆ………か………ゆか』

囁くような声はやがて有香の名前に変わる。側で聞いている二人の警察官も、不気味な雰囲気のある通話に耳を澄ましている。

『有香……また次の機会に——』

何度も名前を連呼した後、一言残して一方的に通話が切られた。

「今のは一体……」

尋常な事態ではないことだけは理解できた様子の眼鏡の警察官がひっそりと呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5668p/>

二律背反 ー何がありえることなのかー

2011年2月19日01時09分発行